

論説：

『大南一統志』編纂に関する一考察

八尾隆生

はじめに

ヴェトナムは長く続いた戦争ののち、深刻な経済危機を迎え、1986年の第6回共産党大会で、開放路線、いわゆるドイモイ政策が開始された。経済の開放は人、モノ、それに情報の交流の開放につながる。そして外国人歴史研究者も原文献に触れることのできる時代がようやく訪れた。

およそ戦争とはどんな「正義」を旗印にしているように、結局は破壊行為を伴うものである。筆者が扱う歴史史料もその一つである。別に書誌学の専門家でもない筆者がヴェトナムの史料にのめりこんでいったのは、そのもつ「新鮮さ」「饒舌さ」そして「未整理な状態」にある。

それ以前は東京の東洋文庫でマイクロフィルムでしか読めなかった原本がそこにあるという感動、年代記に出てくる人物の族譜が実際に目に出来るという興奮、こうした史料へのアクセス面での激変は多くの同業者を魅了し、ヴェトナムへと駆り立てた。本国での雑誌・研究書の創刊も相次ぎ、洪水のように新しい情報が入ってくる。

しかし、我々が史料として考えるものは、もともと「史料」として作成されたものとは限らず、またくぐり抜けてきた歴史や作成の目的は異なっている。ある一つの本がどういう道をたどって今の形となってきたのか、そのことに思いを馳せる必要がある。そうした当たり前のことの欠如が、ヴェトナム史研究界（外国は言うに及ばずヴェトナム本国においても）の最大の弱点であることは

否定できない。

折しも2000年より東北大学の磯部彰氏を研究代表者として、特定領域研究『東アジア出版文化の研究』（以下、「出版科研」）が開始され、筆者もその一員に加えていただき、ヴェトナムにおける出版をめぐる課題を扱うこととなった。上述の弱点を認識しつつその責に応えるべく筆者が選んだテーマは、阮Nguyễn朝期に編纂された官撰の地誌である『大南一統志』*Đại Nam Nhất thống chí*（以下『一統志』NTC）の編纂過程の考察である。

筆者は阮朝より一時代前の黎Le朝史を専門とする者ではあるが、黎朝期には総合的な地誌はごくわずかしがなく、『一統志』なしに研究は不可能である。にもかかわらず、前述の如く筆者をも含めてヴェトナム史研究者はあまりにその書の成り立ちや性格に注意をはらってこなかった（詳細は第2章）。

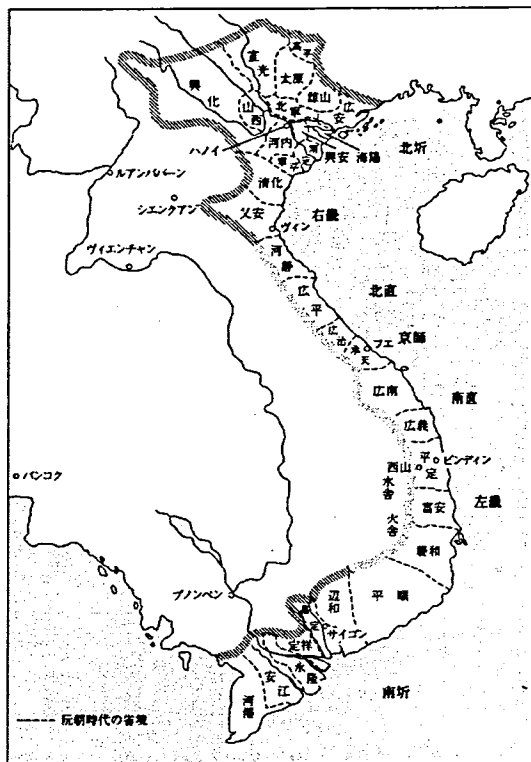
以下では第1章でまず『一統志』をも含めた主としてヴェトナムの国家機関が所蔵している書籍・文書の伝来の過程を概観する。次に第2章では『一統志』の編纂過程を考察したのち、10本以上存在の確認されている写本の相互の関係を推定する。第3章では主として「人物志」に掲載されている人物の数や異動を、各写本と20世紀初頭に刊行された版本と比較し、版本が単なる写本（稿本）の補充版ではなく、当時のヴェトナムの置かれた政治的情勢に大きく影響された産物であったことを論じる。最後に、残された課題をいくつか挙げて結語に代えたい。

第1章 ヴェトナムの漢喃文献の伝来

前近代ヴェトナムの書物は、公式文字である漢字とヴェトナムの民族文字である字喃chữ Nômを用いて作成された。これらをヴェトナム人は「漢喃Hán Nôm本」と呼ぶ。そこで本稿でもそれに従うこととする⁽¹⁾。

ヴェトナムの歴代王朝は中国の影響を大きく受け、漢喃書籍、特に歴史書編纂に非常に熱心であった。また編纂と同時に収集にも熱心で、18世紀中葉の科挙官僚であり、博識の学者でもあった黎貴惇Lê Quý Đônが著した黎朝の通史『大越通史』の中には「芸文志」があり、113の書籍が紹介されている。もともと、当時においてすでに失われ、名前のみが知られているものも多い。19世紀になると阮朝を代表する学者である潘輝注Phan Huy Chúによって、阮朝以前の歴代諸王朝の様々な制度を記した類書『歴朝憲章類誌』が編纂されたが、その「文籍誌」にも、207種類の書物が紹介されている⁽²⁾。黎朝が有していた書物はその滅亡前後に多くが失われたが、それでも一部は阮王朝に受け継がれたと考えられる。その約半世紀の後、ヴェトナムはフランスの植民地支配下に入るのだが、阮朝はアンナンAn Namと呼ばれたヴェトナム中部地方のみを支配する王国として1945年まで存続を許された。外交権などのほとんどの政治権力を奪われたものの、阮朝諸帝は専ら文化事業に力を注ぎ、大規模な図書刊行事業を継続して行った。

一方フランス植民地政権側も、人文社会科学総合研究機関である「極東学院」をハノイHà Nộiに設け（1900年）、P. ペリオやE. ガスパルドン、L. カディエールといった研究者達がフエHuếにある阮朝王宮の所蔵図書を調査し、複数部あるものは一部を学院の図書館の所蔵にし、一部しかないもので重要と思われる文献については、筆写させて学院用の写本を作った。また科挙の廃止によって役人になりそこねた漢学者を動員して、地方



明命期のベトナム
[嶋尾 2001 : 289] より

から多くの書籍を精力的に収集した。その中には、彼ら自身が作成した「古紙」(cổ chi、今で言うところの「野外調査ノート」にあたるようなもの)まで含まれている。

そこに日本人研究者がやってくる。松本信広、山本達郎、藤原利一郎氏らが戦前・戦中にハノイを訪れ、同院の協力を得て、これら学院所蔵漢喃本（注1の如く当時は安南本と呼ばれた）の目録を作成しており、それによりどのような史料が学院に集められたのかを知ることが出来る。また松本氏が当時同院院長であったG. セデスの仲介で、阮朝の年代記である『大南寔録』を王宮所蔵の版木から数部印刷することに成功し、日本にもたらされた [松本 1936]。それらは現在、東洋文庫、慶應義塾大学、東京大学、京都大学等に所蔵され、その慶應義塾大学所蔵本をもとに、全20冊の影印本が出版された（完結は1981年）。

日本人の歴史への興味は研究者だけに止まらない。当時在ハノイ日本領事館員であった永田安吉氏は漢喃史料を収集し、帰国後にそれらを東京の東洋文庫に寄贈した。それにより、日本における最初の公的機関による「漢喃本」コレクションが誕生した。また山本氏も多くの書籍を購入、収集されたが、惜しくもその多くは空襲で焼失した。

長く続いた植民地支配と独立戦争を経て、1954年締結のジュネーヴ協定により、南北ベトナムが成立する。極東学院はパリに移転することとなり、学院が所蔵していた書籍はハノイに残され、フランスは重要史料の多くをマイクロフィルムにして持ち帰った。北政権はひとまずそれらを社会科学情報院の図書館に保管することとした。南北統一の後、社会科学委員会の下部機関として漢喃研究院が発足し、極東学院の旧蔵本はそこが管理・研究することとなった。同院は積極的に史料の収集を継続し、外国人にも公開している⁽⁴⁾。また所蔵図書の書目も作成し、その研究成果は機関誌*Tap chí Hán Nôm*（『漢喃雑誌』）上で発表されている⁽⁴⁾。また極東学院との関係復活にともない、重要図書籍の複製作業も数多く成されるようになってきており、我々外国人研究者も効率よく調査ができるようになった。

一方、ジュネーヴ協定により、阮朝の旧都フエは南ベトナム政権の統治下に入り、阮朝所蔵図書も南ベトナム政権により保管されることとなった。この時、南ベトナムのゴ・ディン・ジェムNgô Đình Diệm政権の文化担当顧問となったのが、日本でも長く研究を続けられた陳荊和氏である。氏は王宮所蔵図書の整理につとめられ、やがてそれらは、戦火を避けてサイゴンの公文書館の管轄下に入り、各地の書庫に保管され⁽⁵⁾、68年のテト攻勢によるフエ市街戦で焼失することを免れた⁽⁶⁾。しかし70年代に入って北側の攻勢が激しくなったため、それらの図書は独立宮殿（旧南ヴェ

トナム大統領官邸、現在では統一宮殿と呼ばれる）の地下収蔵庫に収められた。

1975年に南ベトナム政権が崩壊し、翌年南北統一がなると、ホーチミンHồ Chí Minh市（サイゴンSài Gòn）の公文書館は第二国家公文書館Trung tâm Lưu trữ Quốc gia IIに再組織化され、阮朝所蔵漢喃図書はそこに移管された。しかし漢喃文書の整理は、経済的問題や、ベトナム語・フランス語文書の整理が優先されたこともあって、遅々として進んではいなかった。

1989年にダナンĐà Nẵng市で開かれた「ホイアンHội An国際シンポジウム」によって海外との学術交流が盛んになったことにより、上記の図書の存在が海外にも知られるようになった。90年代に入ってそれらはハノイにある第一国家公文書館Trung tâm Lưu trữ Quốc gia Iに移管され、版木だけはそのままダラットĐà Lạtにある第二国家公文書館収蔵庫に残された。

これらの中で最重要史料と考えられるのは、阮朝硃本châu bảnと全国規模で存在した地簿địa bạである。

阮朝硃本とは、嘉隆Gia Long帝より保大Bảo Đại帝までの公文書及びその草稿の総称で、阮朝の年代記『大南寔録』*Đại Nam Thực lục*などの編纂にあたっての主要依拠史料である。戦災等で8割近くが失われたが、それでも約200万件もの文書が残る。第一国家公文書館⁽⁷⁾に移管された後、目録作成が継続中であるが、残念ながら国家機密に属するものも含まれているらしく、外国人はおろか、整理にあたっている一部の人間以外は閲覧の機会は今のところない⁽⁸⁾。

地簿とは、約一万部からなる阮朝の基本土地台帳である。19世紀初頭に村毎にそれぞれ甲、乙、丙の3部ずつ作られた。正本である甲本が現在、上記第一公文書館に保管されているが、外国人はやはり閲覧できない。副本である乙本は王朝の地方官庁に収蔵されていたが、現在は漢喃研究院が

部分的に所蔵しており、閲覧可能である。丙本は各村落に残されていたが、多くは散逸してしまった。田畑の一筆毎に面積、位置、地味、耕作者などが詳細に記載されており、実地調査と組み合わせれば、まさに「土地の歴史」の研究が可能となる。時勢に翻弄され続けてきた諸文献の歩みは概ね [図1] のようになる。長い年月を経て、ようやく効率的に（といっても多くの制約はまだまだあるが）文献にあたるのが可能となったのである。筆者の研究対象である『一統志』も然りである⁹⁾。

第2章 『一統志』版本と写本の来歴

(1) 『一統志』編纂と政治史

ヴェトナム阮朝には数多くの地理書が刊行されたが、その中で最も全国的かつ網羅的な内容をもつのが『一統志』である。本書は複雑な編纂経緯をたどったが、まず以下に関連事項を年表にまとめておく。

| | |
|------|---|
| 1558 | 清化Thanh Hóa出身の阮氏、中部ヴェトナムで事実上自立し（広南Quảng Nam国）、北部の黎朝（鄭Trịnh氏政権）と対峙 |
| 1777 | 広南国（が西山Tây Sơn阮氏によって）滅亡 |
| 1802 | 阮福映Nguyễn Phúc Anhが阮朝創設（1804越南国王として清から冊封される） |
| 1849 | 『一統志』編纂の議が出され、嗣徳Tự Đức帝がそれを裁可 |
| 1850 | 広治Quảng Trị省廃止、承天Thừa Thiên府に併入 |
| 1852 | 『大南列傳』前編刊行（『大南寔録』前編に対応） |
| 1853 | 河静Hà Tĩnh省廃止、一部を乂安Nghệ An省に入れ、残りは河静道に再編成 |
| 1858 | フランスの侵略開始 |
| 1862 | 南部3省をフランスに割譲 |
| 1873 | 北部でフランスと交戦 |
| 1876 | 河静省、広治省再設置 |
| 1882 | 清仏戦争勃発（84年まで）。同年、嗣徳18年（1865年）までを採録対象にした『一統志』の草本が完成するも、更に34年（1881年）までに対象を拡大して補編の編纂を命令。版本は作成されず |
| 1883 | フエ条約でフランスの保護国に |
| 1885 | 咸宜Hàm Nghi帝フエを脱出、反仏抵抗（勤王運動—文紳蜂起）を指令。フランスはフエに同慶Đông Khánh帝を擁立 |
| 1889 | 『大南正編列傳』初集刊行 |
| 1900 | フランス極東学院がハノイに移動（前身が1898サイゴンに出来る）。フエ王宮の史料などの調査本格的に開始 |
| 1907 | 成泰Thành Thái帝廃位され、維新Duy Tân帝即位 |
| 1909 | 国史館より『大南正編列傳』二集刊行（維新3年9月12日題） |

| | |
|---------|---|
| 1910 | 国史館より『一統志』17巻刊行（維新3年12月8日題） |
| 1914 | 第一世界大戦勃発 |
| 1916 | 反仏蜂起謀議が発覚、維新帝レユニオン島に配流 |
| 1941 | 日本の印度支那研究会より刊本『一統志』の影印本（洋装2冊）出版 ⁽¹⁰⁾ |
| 1945 | 八月革命により阮朝滅亡 |
| 1954 | 南北ヴェトナム成立。極東学院の『一統志』写本は北政権に、王宮稿本は南政権にわたったはず |
| 1970-71 | 北でヴェトナム語訳『一統志』出版 |
| 1976 | 南北ヴェトナム統一。サイゴンの公文書館はそのまま現在の第二国家公文書館となり、本来ならば原嗣徳稿本『一統志』も同館に収蔵されていたはず |
| 1990代 | 第一国家公文書館に原嗣徳稿本も移管されたはず |

同書は1849年に嗣徳帝の命により編纂が開始され、フランスの侵略が本格化する中、1882年に、嗣徳18年（1865年）までを採録対象にした同書の稿本が完成するも、帝はその出来に満足せず、更に嗣徳34年（1881年）までに対象を拡大して補編を編纂することを命令し、版本は作成されなかった。その命に従い、なおも編纂は続けられたはずであるが、嗣徳帝没後の翌85年、咸宜帝は反仏勢力と共にフエ王宮を脱出し、反仏抵抗（勤皇運動—文紳蜂起）を指令した。フランスはフエに同慶帝を擁立したが、その時の混乱で補編（未完成）は散佚してしまった。上述の事情は『大南寔録』正編第四紀86 嗣徳35年夏6月の条に記されているが、肝心の嗣徳18年（1865年）までを採録対象にした同書の稿本がどうなったかについては言及がない。

1910年になって中部各省のみを対象とした『一統志』（全17巻）が刊行され、1941年には日本の印度支那研究会（松本信広、山本達郎氏が参画）より同刊本の影印本（洋装2冊）が出版された。

（2）写本の系統

出版科研での筆者の最終目的は、上記の刊本と、嗣徳期の稿本を元にしたと思われるいくつかの写

本を照合し、校合作成のための予備的作業をすることにあった。刊本（及びその影印本）の方は日本の多くの公的機関にも所蔵され、閲覧は容易である。しかし嗣徳期の稿本及びその写本のほうにはいろいろ問題がある。

科研の調査（第1回が2001年夏、第2回が2001年—02年冬、第3回が2003年—03年冬、第4回が2004年夏）により、筆者は第一国家公文書館、史学院Viện Sử học、漢喃研究院、国家図書館Thư viện Quốc giaなどに『一統志』の写本が蔵されていることを確認した。以下がその全容である。

| | |
|--------------|--|
| 第一国家 公文書館 | V.685-695 |
| 史学院 | Hv.38, Hv.140, (Hv.255), Hv.527, Hv.572-579 |
| 漢喃研究院 | A.69, A.1448, A.2033, A.2806, VHv.129, VHv.985, VHv.624, VHv.1707, VHv.1359, VHv.2684 |
| 国家図書館 | R.597-599 |

このうち史学院のHv.255本はカードのみで、現物は見あたらないとの回答を受けた。また、漢喃

研究院のA.2806本と国家図書館のR.597-599本は簡略版である⁽¹¹⁾。

更にフランスにもいくつかの写本が存在する(した)ことは先人の報告により既に知られているが、それらに関しては今後に期したい。

問題の第一国家公文書館蔵写本であるが、同書の表紙には旧サイゴンの文書館のダラット支部であることを示した図書番号ラベルが貼ってあり、旧王宮所蔵図書であることはほぼ間違いない。しかし、これが嗣徳稿本の原本であるかはにはわかに判断できない。同文書館には版本の『一統志』も所蔵されており、それらの表紙には勅封用の金紙が用いられていて、いかにも王宮図書という印象を与えるのに対して、写本の表紙は他の写本と変わりが無い。

そこで写本の相互関係を考察すべく、各写本(中部各省の巻が含まれている第一国家公文書館蔵V.685-695本(各巻ごとに図書番号が異なる)、史学院蔵Hv.38, Hv.140本、漢喃研究院蔵A.69, A.1448, VHv.129⁽¹²⁾, VHv.1707本)、それに版本の「人物志」に掲載されている人物(阮朝期の人物に限った)の有無や順序をデータ化してみた。他の項目では、行政区画の変遷の叙述に若干の相違はあるものの、概して変化に乏しいのに対して、人物志、とりわけ阮朝期の部分は筆写の段階で採録されている人物の顔ぶれや掲載順が異なると考えたからである。その結果が[表1]である。

次にこの表の情報をもとに、各写本と版本との相関関係を探ってみたのが[表2]、[表3]である。まず二つの表から明らかになった点を列挙しよう。

版本は概して諸写本との相関性が小さい。ただし、省ごとに見ると京師を含む承天府の部分と、歴史の浅い中部の最南端(慶和Khánh Hòa省、平順Bình Thuận道)はよく対応している。それにA.69本の広治省の巻はほぼ完全に一致しており、稿本

作成の段階(1865年以前)では広治省が存在していなかったことを勘案すると、この部分は後に版本から筆写したものをA.69本に加えた可能性が高い。実際同本の「建置沿革」の部分では、維新年間のことまで記述が及んでいる。

次に第一国家公文書館蔵写本であるが、他本との相関性が最も高いとは言えない。よって、他本に影響を与えているとは考えにくいこの蔵本が原嗣徳稿本とは言えないであろう。流伝の過程で原稿本はやはり失われてしまったと考えるのが妥当である。

一方、A.69本の方は他本との相関性がより高い。山本[1943:9-10]、チャン・ヴァン・ザップTrần Văn Giáp [1970:338-46]はともに『一統志』に言及する際にA.69本をもとにしており、この書が原稿本を最も忠実に再写したものと考えてよさそうである⁽¹³⁾。ただし広治省の部分は上述の如く後から付け加わったものであるが。

最後に奇異に感じられるのは、[表2]で見える如く、それぞれが一つの本であるにも関わらず、省ごとに見ると相関関係が高かったり低かったりすることが非常に多いことである。

各写本とも、全巻が同じ筆跡で書かれているものはない。しかし写本という性格上、筆跡が違うからといって直ちに別本の寄せ集めと断定することは出来ない。数人で分担して抄写したことも十分考えられるからである。

しかし省ごと相関関係が違うという事実は、その寄せ集め行為のあったことを窺わせるに十分であろう。また、抄写にあたって複数の原本を使用したことも考えられる。

残念ながら各写本の来歴は、その収集段階までさかのぼる情報がいずれの収蔵機関にもなく、これ以上の系統探索は不可能に近いのが現実である⁽¹⁴⁾。

第3章 版本と写本の異動—人物志を中心に—

第2章で述べたことから、当初の研究目的、つまり版本と写本の校合作成の糸口を探るということは、無意味であることが明らかとなった。

そこで筆者の関心は、その相違を生んだ原因に移らざるを得なかった。

阮朝は年表にあるごとく、1802年から1945年まで続いた王朝であるが、『一統志』編纂の時期にフランスの侵略が開始され、1884年には保護国の地位に落ちる。しかも、南部及びハノイ、ハイフォンHải Phòngはフランス直轄地、北部は保護領となって事実上阮朝の威声は及ばなくなった。

阮朝創立以前には西山やタイ・クメールとの戦いがあり、第二代明命Minh Mạng帝時代には中興功臣黎文悦Lê Văn Duyệtの子黎文儂Lê Văn Khôiと農文雲Nông Văn Vânの反乱があり、不安定要素が絶えず存在した。よって大規模な編纂事業が本格化するのには嗣徳帝の治世に入ってからであった⁽¹⁵⁾。

それ以前の歴史編纂のための資料収集は決して十分ではなく、それが稿本まで作られながら『一統志』が結局嗣徳帝による刊行の許可がおりなかった理由である。

そしてその没後、フランスの支配下に置かれた歴代皇帝の下でも、大規模な編纂事業が続けられる。『大南寔録』しかり、『大越歴朝登科録』しかり、『一統志』しかりである。

時間の経過は資料収集の状況を大きく変化させたことは想像に難くない。特に〔表1〕の照合の対象とした阮朝期の人物に関しては、時の評価を反映して大きな変動があった。にもかかわらず、筆者は研究開始前後、版本は写本にその後の人物を付け加えた程度のものでらうという甘い考えもっていた。しかし事實は違った。

幸い版本には凡例（『一統志』の凡例に記述内容の採録基準（全部で30条）が存在するので⁽¹⁶⁾、版

本の編纂の方針からみてゆこう。重要な部分を引用する。

一、是志奉 準欽修自成泰十八年以前、故凡事在十九年以後者、均未登載（第1条）

一、人物志、何係勲業素著、及節義可風者、不拘官職大小、皆從寔編著、仍以年代久近爲序、不泥官職大小也（第27条）

一、本朝名臣、各已詳見本傳。茲各摘録其梗概、以省煩文。其未有本傳、而回休在奉 準年月以前者、欽遵同慶三年正編列傳例⁽¹⁷⁾、取次登載（以下略）（第28条）

これによると、まず記述内容は成泰18年（1906）までで、それ以降のものは反映されていない。次に中国の正史や『大南列傳』と異なり、『一統志』人物志では逆臣、叛臣等は採録されず、専ら名声や功績のあるものが採録され、その功績の度合いや地位の上下にかかわらず、時代順に配列したとある。

最後に同人物志は『大南列傳』の簡略版ともいうべきもので、内容は簡略であり、しかも採録年限も『大南正編列傳』第二集に従って同慶3年までとし、それまでに死去もしくは致仕した者を対象にしたとある。

版本『一統志』と『大南正編列傳』第二集は主要編纂者の顔ぶれが全く同一であり、人物志に限って言えば、稿本の系統を引く写本と『大南列傳』前編、『大南正編列傳』第一集、第二集（およびそれが依拠した資料）によって編纂されたことは明白である。

ではこの凡例は本当に忠実に守られているかといふとかならずしもそうではない。

まず版本は広南国時代の人物を写本以上に大量に「本朝」、つまり阮朝期の部分に入れている。広南国時代のヴェトナムは北部に黎帝を戴く鄭氏政権が存在し、阮氏も名目上その臣下の立場をとつ

ていた⁽¹⁸⁾。そして阮朝の創立は「中興」とされ、南遷の祖阮潢が太祖、それ以降の祖先(「主」という漢字から派生したチュア chúa という称号をもっていた)にも皇帝としての諡号及び廟号が付与され、阮朝時代に組み込まれた。版本はある意味それに忠実に従っているのである。ただし、同時期の鄭氏政権下の人物は「黎朝」の部分に採録されている。しかも同時期を扱う『大南列傳』前編ですら採録していない人物を大量に加えているのである。

二つ目はあまり大きなことではないが、年代順に配列したとするが必ずしもそうはなっていない([表1]参照)。特に親子そろって掲載されている場合、連続していることが多い。

次に凡例からは窺えない特徴を指摘する。

まず貫地の「恣意的」な変更である。行政区画の変更に従って版本と写本が食い違いを見せているのは当然としても、それによらない場合がある。ヴェトナムでは俗に「三代ある所に定住すればそこが新しい貫地になる」という。もちろん法的根拠などがあるわけではない。

阮氏の南遷に従って多くの清化出身者が南に移動した。その子孫たちを移動先の地に貫地がえするのは上記の俗諺にてらしても妥当かもしれないが、初代、二代目までも一括して貫地を移したとするのはやはり恣意性が感じられる。

さらにやっかいなことは、元の貫地と子孫の貫地(多くは都のある承天府)の両方に氏名の出でくる人物が少なくないことである⁽¹⁹⁾。この中には「詳しくは〇〇省人物志を見よ」という文言までついているものもあり、決して編纂が杜撰であったというわけではない。

ところで筆者は前稿[2004a]で、黎朝創立の記録『藍山實録』の編纂過程を論じた際、阮朝時代には阮氏のもと黎朝の臣下であったことを忘れてがたいために、意図的に清化地方を無視したと述べたが、いささか決めつけすぎたきらいがあったと

反省している。版本『一統志』清化省の巻には他省にはない「陵墓」の項目があり、黎朝諸帝の墓所の詳細な記述がある。阮氏は別に黎朝を篡奪したわけではないので、その正統な後継者として清化にもある程度配慮する必要があったのであろう⁽²⁰⁾。そしてその一方で新都となった承天の人物の数を増やす必要性から、このような併載が行われたと考えられる。

次に反対に写本には氏名があるのに版本にはない者がいる(計96人)という事実である。これも地域的にみて偏りがあり、何らかの統一的な方針によって削除されたと見るのが妥当である。その方針、ないし傾向を探るため、[表1]に基づいて作成したのが[表4]、[表5]である。

[表4]は人物志の本文を読み、「領郷貢」、「郷薦」とか、「〇〇科進士出身」などあるものを文臣とし、専ら武勲で知られる者を武臣、わずかではあるが、隠逸とされながら実際は俗世のことに関わったことのある人物を隠逸として省ごとに分類し、版本と写本のそれぞれに氏名があるか対照しながらその数を集計したものである。写本の方は第二章で見た如く、系統が判明しないため、一括していずれか一本にでも氏名があれば「有名」とした⁽²¹⁾。当然のことであるが版本と写本の両方に名の見えない者は考察の対象外である⁽²²⁾。

[表4]から歴然としているのは、清化、承天の武臣の大量増(清化の場合、写本12人から版本21人へ。承天の場合、写本66人から版本93人へ)、承天の文武両方の数の突出(写本段階で124/全省370人=34%、版本段階で154/433人=36%)、乂安の文臣の激増(写本6人から版本30人へ)である。

清化の事由は既に述べた通りである。承天の場合は武臣が増加したものの、文臣は増加と削減の両方が大きいと微増にとどまっている(増加が22人で減少が18人)。しかし文武の両方で増加した者の中には、宗室 tông thất の支派で「尊室 tôn thất」姓を持つ者が大量に含まれている(12人)。

又安は、ヴェトナム史では常識に属するが、阮朝期に科挙官僚を多く輩出したところである。阮初は政権内に功績をあげた武臣の存在が大きかったが、科挙の再開と、半世紀近い時間の流れとともに、治績によって掲載されるに足りる人物が数多く登場したのである。また反乱が起こった際も地方官として鎮圧に尽力している者が多い。

あと、都に近い広平Quảng Bình、広治、広南の文臣も微増（広平11人増、広治6人増、広南5人増）を見せている。前述の貫地変更によるものも多いが、阮朝にとってこれらの地は「畿内」ともいべき土地であり、それらの人士が多く収録されるようになったのであろう。

反対に減少を見せているのが平定Binh Định省の武臣である（写本段階で32人が版本では10人）。その理由を探るため〔表5〕に移りたい。

〔表5〕は、ある人物が功績をあげる機会となったであろう四つの大きな事件をとりあげ、それぞれの事件に関わっていたと記録された人物がどれだけいたか、省ごとに集計したものである。

最初の鄭氏との戦いは、その時期が広南国時代の半ばである1672年に一端終了したため、それに関わった人物は清化及び清化から回貫した広治、承天出身者が圧倒的に多い（写本段階で12/14人＝86%、版本段階で15/17人＝88%）。ただし、鄭氏との戦いが早期に行われたこともあって、四つの事件の内でのこの事件に関わった者の収録数は非常に少ない（写本段階で12/219人＝5%、版本段階で15/245人＝6%）。

次の西山との戦いに関係する者は逆に大きな数を占める（四つの事件の内での計算した場合、写本では172/219人＝79%、版本段階で160/245人＝65%。人物志全体でも、写本で172/370人＝46%、版本段階で160/433人＝37%）。時代を経ることにより、全体に占める対西山戦に関する人物の割合は減ってゆくが、それでも上記の数値は、いかにこの戦いが広南阮氏と阮朝にとって、記憶に残る

重く長い戦いであったかを物語っている。

平定は西山の根拠地であり、何度となく戦いが行われ、特に1801年の戦いでは双方に膨大な犠牲者を出した。写本段階ではこの時功績を挙げた者（多くは戦死しているが）をかなり下級のものまで収録しているのである。版本段階ではおそらく北中部と南中部のバランスを保つため、また上記のごとく新しい情報が入ってくることにより、収録基準のある程度の統一の必要性から、下級兵士は削除されてしまったのであろう。実際、削除された人物の多くは『大南列傳』に伝をもっていない（伝をもっているのは5/16人）。

つぎは黎文懐・農文雲の反乱である。中興第一の功臣と目される黎文悦の子黎文懐と養子でヌンNùng族の首長農文雲は第二代明命帝の強引な集権化に対して反乱を起こした（1833-1835年）。これにも多くの文武の人士が関わったのだが、反乱が比較的速く鎮圧されたこと、反乱の場が北部山岳部と南部のメコンデルタ地方であったため、中央派遣の役人や軍人は別として、大いに活躍したのは在地の人々、すなわち本論では扱わない北部、南部の人々であった。そのことがこの反乱に関わった者の掲載者数が少ない（四事件中、写本段階で25/219人＝11%、版本段階で32/245人＝13%）理由であらう。

最後がフランスの侵略である。その侵略は1858年のダナン攻撃から本格化するが、写本の段階では1865年までを対象としているために、その段階ではこの事件にかかわっているものも生存している者が多く（完全に保護国となるのが1885年）、収録の対象にはほとんどなっていない（全省で8人）。版本の方は1888年まで収録対象期限が延びたため、かなり増加しているが、それでも事件の大きさに比して多いとは言えない（中部全省で36人）。

しかしそれでも戦死した人物を中心に若干でも抗仏戦に参加した者を、フランスの植民地支配下で収録したことは、ある意味驚異的である。さす

がにフランスのことに言及する際は「大法国」という書き方をしているが⁽²³⁾。ただ、これをもって直ちに愛国心のあらわれだとか、ナショナリズムの問題に直結すると評価するのにはいささか無理がある。

林正子 [2001] は、阮朝が威信維持のために漢字、漢学に固執するほどフランス植民地政権にとってはヴェトナム語のラテン文字化やキリスト教による人心収攬が容易になり、阮朝は無害な存在になったと評している。

事実、当時のヴェトナムは咸宜帝の抗仏檄文に始まる文紳蜂起が鎮圧され、新しい革命・救国思想をもった新世代の人物が登場する時期であった⁽²⁴⁾。しかし彼らがこの『一統志』に収録されている個人々に共感を持つことはあっても、『一統志』を自己の活動に用いたなどということは、ついぞ聞いたことがない⁽²⁵⁾。

結語にかえて

出版科研では出版に関わるあらゆることが研究対象となっている。また2003年度広島史学研究会研究大会シンポジウムでは「近世出版文化をめぐる諸問題」と題して近世の中国、日本、ヨーロッパの出版文化に関わる比較が試みられた⁽²⁶⁾。

その中で注目されたのが読み手の問題である。当然ではあるが、読み手を意識する以上、出版されるものの選択がなされ、書の内容やレイアウトにも工夫がなされる。しかし、商業出版ではない、読み手すら考慮に入れない、ただ編纂することだけに意義を見いだす編纂・出版事業も存在しえたのである。

19世紀には他の東南アジア諸国もヴェトナム同様、ヨーロッパ列強の植民地と化し、外交や軍事、さらには内政の権限さえも奪われた王族たちは、ありあまる時間と金を、「伝統文化」保存事業につ

ぎ込むことにより、かろうじてその存在感、威厳を維持するしかなかった。マタラムのスルタンがヒンドゥー＝ジャワ文化の保存に努力したことなど、みなそうである。阮朝が書籍の収集と、大規模な編纂事業を行ったのも同様の意図に基づく。編纂することに意義があったこれらの書籍に当時の革命家が目もくれないのは当然のことであった。

しかし、である。そうした阮朝の威信を守るために作られた書籍が、新政権によって王朝自体は最低の評価を受けた（ている）にもかかわらず、「歴史学・地理学」の「資料」として今も重宝されているのはなんと皮肉なことではないか。

『一統志』の撰者からすれば、筆者の行った内容のデータ化などは不本意極まりないものであったに違いない。稚拙ではあるが、データ化することによって、その編纂の方針やその結果としての数値の水増しなどの実態の一端を覗くことができたのも事実であるが。

今後残されたことはいまでもなくまず写本の校合本作成である。各写本間の相関性はどれも比較的高いので、前述A.69本から広治省の巻を取り去ったものを底本として、他の本と校合していくのが最善であろう。今のヴェトナム人研究者が専ら使用している現代ヴェトナム訳本は史学院が70年代初に自院所蔵のHv.140本を底本に、A.69本を参考にして作成されたものであるが⁽²⁷⁾、A.69本の方を底本とするべきであった。

ただし筆者の研究はもともと版本との関係を探るということから始まったため、写本には存在する北部及び南部の各省のデータはもちろん、写本自体も多くが未収集のままである。『一統志』の恩恵を蒙っている多くの外国人研究者とヴェトナム人研究者とが協力して、この史料批判が決定的に遅れている事態の改善に努力するべきであろう⁽²⁸⁾。

* 本稿の第1章は<参考文献>八尾 [2003a] の一

部を、第2章は八尾〔2002〕の序文を、第3章は第2回ヴェトナム学国際学会（2004年7月14-16日、於ヴェトナム・ホーチミン市）での発表原稿をもとに、大幅に増補改稿したものである。また執筆にあたっては平成13-16年度文部科学省科学研究費（特定領域研究）『東アジア出版文化の研究』の研究費補助を受けた。

<漢喃本の目録>

- ⊖ 藤原利一郎. 1974. 「パリ国立図書館新収安南本目録」『史窓』32.
- ⊗ 後藤 均平. 1995. 「国立国会図書館所蔵越南本一覧」『アジア資料通報』33(3).
- ⊕ 後藤 均平. 1999. 『東洋文庫蔵越南本書目』東洋文庫.
- ⊗ 岩井 大慧. 1935. 「永田安吉氏蒐集安南本目録」『史学』14(2).
- ⊗ 川本 邦衛. 1971. 「越南社会科学書院所蔵漢喃本目録」『慶応大学言語文化研究所紀要』2.
- ⊕ 松本 信広. 1934. 「河内仏国極東学院所蔵安南本書目」『史学』13(4).
- ⊗ 松本 信広. 1935. 「越南王室所蔵安南本書目並びに追記」『史学』14(2).
- ⊗ 東洋文庫（編）. 1939. 『東洋文庫朝鮮本分類目録附安南本目録』東洋文庫.
- ⊗ 山本 達郎. 1938. 「河内仏国極東学院所蔵字喃本及び安南版漢籍書目並びに追記」『史学』16(4).
- ⊗ 山本 達郎. 1953. 「パリ国民図書館所蔵安南本目録」『東洋学報』36(1).
- ⊕ 山本 達郎. 1953. 「河内仏国極東学院所蔵安南本追加目録」『東洋学報』36(2).
- ⊗ 山本達郎. 1954. 「パリアジア協会所蔵安南本書目」『東洋文化研究所紀要』5.
- ⊗ 劉 春銀・王 小盾・陳 義（主編）. 2002. 『越南漢喃文獻目録提要』全2冊. 台北：中國文哲研究所（電子版：<http://www.litphil.sinica.edu.tw/hannan/>）
- ⊕ 和田 正彦. 1992-93. 「松本信廣博士将来の安南本について—慶應義塾図書館・松本文庫所蔵安南本解題—（上）（中）（下）」『史学』62(1, 2), (3), 63(1, 2).
- ⊗ Cục Lưu trữ Nhà nước, Đại học Huế, Trung tâm Nghiên cứu Việt Nam và Giao lưu Văn hóa（国家公文書局・フエ大学・ヴェトナム研究文化交流センター）（eds.）. 1998. *Mục lục Châu bản Triều Nguyễn. tập II. Năm Minh Mệnh 6 (1825) và 7 (1826)*（『阮朝硃本目録』第二集 明命6、7年（1825-26））. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa（文化出版社）.
- ⊖ Thư viện Khoa học Xã hội（社会科学図書館）（ed.）. 1969-72. *Thư mục Hán Nôm*（『漢喃書籍書目』）. 11 vols. Hà Nội.（油印本、未公刊）.
- ⊕ Trần Kinh Hòa（陳 荊和）. *Mục lục Châu bản Triều Nguyễn. tập thứ I. Triều Gia Long*（『阮朝硃本目録』第一集 嘉隆朝）. Huế: Nhà xuất bản Đại học.
- ⊗ Trần Kinh Hòa（陳 荊和）. 1962. *Mục lục Châu bản Triều Nguyễn. tập thứ II. Triều Minh Mạng*（『阮朝硃本目録』第二集 明命朝）. Huế: Nhà xuất bản Đại học.
- ⊕ Trung tâm Nghiên cứu Quốc học（国学研究センター）（ed.）. 2003. *Châu bản Triều Tự Đức (1848-1883) (Tuyển chọn và lược thuật)*（『嗣德硃本（1848-1883）（選録・略述）』）. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn học（文学出版社）.
- ⊗ Viện Nghiên cứu Hán Nôm & École française d'Extrême-Orient（漢喃研究院・フランス極東学院）（eds.）. 1993. *Di sản Hán Nôm Việt Nam - Thư mục Đề yếu*（『ヴェトナム漢喃書籍の遺産—書目提要』）. 3 vols. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội（社会科学出版社、以下

NXBKHXH).

- ㉞ Viện Nghiên cứu Hán Nôm (ed.). 2002a. *Di sản Hán Nôm Việt Nam - Thư mục Đề yếu-*. Bồ di I. Quyền Thượng (Thần sắc, Thần tích, Tục lệ) (『ヴェトナム漢喃書籍の遺産—書目提要』補遺I 上巻(神勅、神籍、俗例)). Hà Nội: NXBKHXH.
- ㉟ Viện Nghiên cứu Hán Nôm (ed.). 2002b. *Di sản Hán Nôm Việt Nam - Thư mục Đề yếu-*. Bồ di I. Quyền Hạ (Tục lệ, Địa bạ, Cổ chi, Xả chi) (『ヴェトナム漢喃書籍の遺産—書目提要』補遺I 下巻(俗例、地簿、古紙、社誌)). Hà Nội: NXBKHXH.
- ㊱ Viện Thông tin Khoa học Xã hội (社会科学情報院) (ed.). 1991. *Thư mục Hương ước Việt Nam. Thời kỳ Cận đại (『越南郷約目録』近代期)*. Hà Nội: Viện Thông tin Khoa học Xã hội.
- ㊲ Viện Thông tin Khoa học Xã hội (ed.). 1994. *Thư mục Hương ước Việt Nam. Văn bản Hán Nôm (『越南郷約目録』漢喃原本)*. Hà Nội: Viện Thông tin Khoa học Xã hội.

<参考文献>

- 林 正子. 2001. 「『大南寔録』の成立過程(二) —フランス支配下における変質を中心として—」『人文・自然・人間科学研究』(拓殖大学) 5.
- 松尾 信之. 1995. 「ヴェトナムの国立第一公文書館」『文明のクロスロード—MUSEUM KYUSHU—』50.
- 桃木 至朗. 1995. 「広南阮氏と「ベトナム国家」
桃木 至朗(編)平成2年度文部省科学研究費(海外学術研究)報告書『南シナ海世界におけるホイアン(ベトナム)の歴史生態的位置』I. 大阪大学文学部.
- 桜井 由躬雄. 1994. 「ベトナムにおいて新たに公開された漢籍資料について」『東方学』88.

- 嶋尾 稔. 2001. 「タイソン朝の成立」『講座東南アジア史』4. 岩波書店.
- 白石 昌也. 1993. 『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識—』巖南堂書店.
- 八尾 隆生. 2002. 『『大南一統志』写本データ』平成13—14年度文部科学省科学研究費(特定領域研究)『東アジア出版文化の研究』調整班B「ベトナムの『地誌』の刊行について」研究成果報告書I. 広島大学大学院文学研究科.
- 八尾 隆生. 2003 a. 「もう一つのヴェトナム近現代史—ヴェトナム前近代史料の歩んだ道—」『歴史と地理 世界史の研究』196. 山川出版社.
- 八尾 隆生. 2003 b. 『『漢喃雑誌』『漢喃研究』総目録—1984—2002—』平成15—16年度文部科学省科学研究費(特定領域研究)『東アジア出版文化の研究』調整班B「ベトナムの『地誌』の刊行について」研究成果報告書II. 広島大学大学院文学研究科. (電子版:
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/orient/yao.html>) .
- 八尾 隆生. 2004 a. 「藍山蜂起と『藍山実録』編纂の系譜—早咲きのヴェトナム「民族主義」『歴史学研究』789.
- 八尾 隆生. 2004 b. 『『大南一統志』写本データ補遺(仮題)』平成15—16年度文部科学省科学研究費(特定領域研究)『東アジア出版文化の研究』調整班B「ベトナムの『地誌』の刊行について」研究成果報告書III. 広島大学大学院文学研究科(近刊).
- 八尾 隆生・岡田 建志. 2003. 「原史料と文書館—ベトナム史料—」『講座 東南アジア史』別巻. 岩波書店.
- Ngô Đức Thọ. 2002. "Đồng Khánh địa dư chí, quá trình biên soạn - lưu truyền và giá trị học thuật". *Tạp chí Hán Nôm* 50. (『同慶地輿誌』—編纂・流伝の過程とその学術的価値—)『漢喃雑誌』

50).

Ngô Thiệu Hiệu et al (eds.), 2001. *Sách Chi dẫn Các Phòng Lưu trữ thời kỳ Thuộc địa - Bảo quản tại Trung tâm Lưu trữ Quốc gia I - Hà Nội*. (『植民地期文書各コレクションガイドブックーハノイ第一国家公文書館保管ー』). Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa.

<漢喃本に関する書誌学的研究>

- 松本 信広. 1936. 「安南史研究上の二資料ーBibliographie annamiteと大南寔録ー」『史学』15(1).
- 陳 荊和. 1982. 『大南寔録』と阮朝硃本について. 『稲・舟・祭』刊行世話人(編). 『稲・舟・祭』六興出版.
- 山本 達郎. 1943. 「安南の地誌についてー同慶地輿誌解説ー」. 東洋文庫(編). 『同慶御覽地輿誌圖』上冊. 東洋文庫.
- L. Cadière et P. Pelliot. 1904. "Première étude sur les sources annamites de l'histoire d'annam". *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient (BEFEO)* 4.
- E. Gaspardone. 1935. "Bibliographie annamite". *BEFEO* 34.
- Trần Văn Giáp. 1938. "Les chapitres bibliographiques de Le-qui-Don et de Phan-huy-Chu". *Bulletin de la Société des études Indochinoises* 13-1 (nouvelle série).
- Trần Văn Giáp, *Tìm hiểu Kho sách Hán Nôm - Nguồn Tư liệu Văn học Sử học Việt Nam* - (『ヴェトナム漢喃書籍の書庫探求』). 2 vols. (vol. 1. (1st ed. 1970. Hà Nội: Thư viện Quốc gia (国家図書館). 2nd ed. 1984). vol. 2. 1990. Hà Nội: NXBKHXH).

註

- (1) 日本ではかつては<目録>の欄にあるように、「安南本」と呼んでいたが、後藤均平[1999]は「越南本」と称している。現在のところ日本人研究者が少ないこともあって、用語の統一はなされていない。なお、「漢喃本」という用語はヴェトナム版漢籍も含めていることが多い。
- (2) 筆者も留学中からお世話になった、ハノイ国家大学のファン・フイ・レPhan Huy Lê教授(ヴェトナム歴史学会会長)はこの潘輝注の末裔である。
- (3) それら新しく収集された漢喃本にはVHの記号が付されている。
- (4) 同雑誌所収の論文(2002年まで)は八尾[2003b]電子版で検索できる。
- (5) ゴ・ドゥック・トNgô Đức Thọ [2002: 23]は、1960年代末にヴェトナム史研究者であるR. B. スミスがダラットの書庫で『同慶地輿誌』を閲覧していたことを紹介している。ちなみに氏によると王宮本『同慶地輿誌』も行方不明のままである。最近、同書は活字印刷で新版が出版されたが、底本は王宮本をもとにした漢喃研究院(旧極東学院所蔵)所蔵写本である。
- (6) ジェムはカトリック教徒で、ヴェトナムの伝統文化を軽視したと言われることがあるが、決してそんな人物ではない。留学中にある先生が御教示くださったのだが、中部ヴェトナム史の専門家であったカディエールの私的書庫が中北部ヴェトナムのクアンビンQuảng Bình近くにあったという。それは北政権の手に入ったが、それをジェムは特殊部隊を使って強奪しようと試みたらしい。試みは失敗し、北爆が激しさを増す中で、その所蔵史料の行方は不明のままである。
- (7) 第一国家公文書館の硃本・地簿を含む文書の

概要及び利用方法に関しては、桜井 [1994]、松尾 [1995]、八尾・岡田 [2003] それにグエン・ティエウ・ヒエウ Nguyễn Thiều Hiệu 他 [2001] を参照。

(8) 硃本に関する詳細は陳 [1982] 参照。

(9) 「文献の邦 (くに)」とヴェトナム人は自国を誇りにしているが、民間でも多くの漢喃文書が残っている。

ヴェトナムは儒教の国であり、それに基づいた家族制度が現存しており、各家や族の「家譜」「族譜」も多く残っている。現在、漢喃研究院が中心となって収集作業を行っているが、まだまだ不十分である。同院所蔵の家譜は多くが北部デルタ地方のもので、中部以南のものはほとんどない。ユネスコの肝いりで「ヴェトナム・ユネスコ・同族協会」が設立され、遠く離れた族の家譜照合、それに基づいた新しい家譜 (現代ヴェトナム語による) の編纂、一族の交流機会の設定、さまざまな情報の開示 (機関誌 *Cội Nguồn* (『みなもと』) に族に関する多くの論文が掲載されている。1996年創刊) などが行われている。

その他に、どの村に行っても出てくるのが「郷約・俗例」「勅封」などである。

郷約・俗例とは18、19世紀頃にできはじめる村や族の掟のようなもので、社会科学情報院が中心となって整理、ローマ字化 (現代ヴェトナム文字化) が進められている。

勅封とは、村の開祖や歴史上の英雄などに対する王朝の認定状で、皇帝の色である黄色 (金色) の紙でつくられ、巻物状になっている。手書きの文面の最後に皇帝の玉璽が押され、その権威を保証するものとなっている。阮朝に入ってから発行量は膨大で、濫発と言うに等しい。内容もワンパターンなので注意をおろそかにしていたが、2002年の調査中に、嗣徳帝時代のものの中に、木活字で印刷

されたと思われるのが見つかった。ハノイにある歴史博物館にも木活字印刷のものが陳列されているが、誰も注目していない。何の目的でこのような印刷形式のものがあるのか判断に苦しむが、継続調査の必要がある。

(10) 山本 [1943] 及びチャン・ヴァン・ザップ Trần Văn Giáp [1970 ; 1990] による。先年、山本達郎氏が死去された折り、氏の遺志により、その蔵書の多くが東洋文庫に寄贈された。それらは公開に備えて現在整理中であるが、その中に上記の影印本の元になった刊本が存在する。

(11) 各本の書誌データは八尾 [2002 ; 2004b] にまとめてある。

(12) VHv.1359本はVHv.985本の乂安、河静の巻だけを再抄したことが明らかなので、考察の対象からはずした。

(13) 一点問題なのは、同本の承天府の巻で、他本が避諱により「尊室」(王族支派に与えられた「姓」とあるのを「宗室」と記していることである。同本は極東学院蔵本であったから、阮朝期に抄されたものに間違いがないので、何故避諱を無視したのかわからない。

(14) 蔵書印により、漢喃研究院の本がもとは旧ハノイ総合大学や党中央図書館に蔵されていたことなどが分かるが、それ以前の情報は無い。

(15) 初代嘉隆帝時代には既に『皇越律例』など、行政に不可欠な類のものは刊行されている。

(16) 写本の方には凡例はもちろん、表文、序文など、一切存在しない。

(17) 『大南列傳』正編二集表

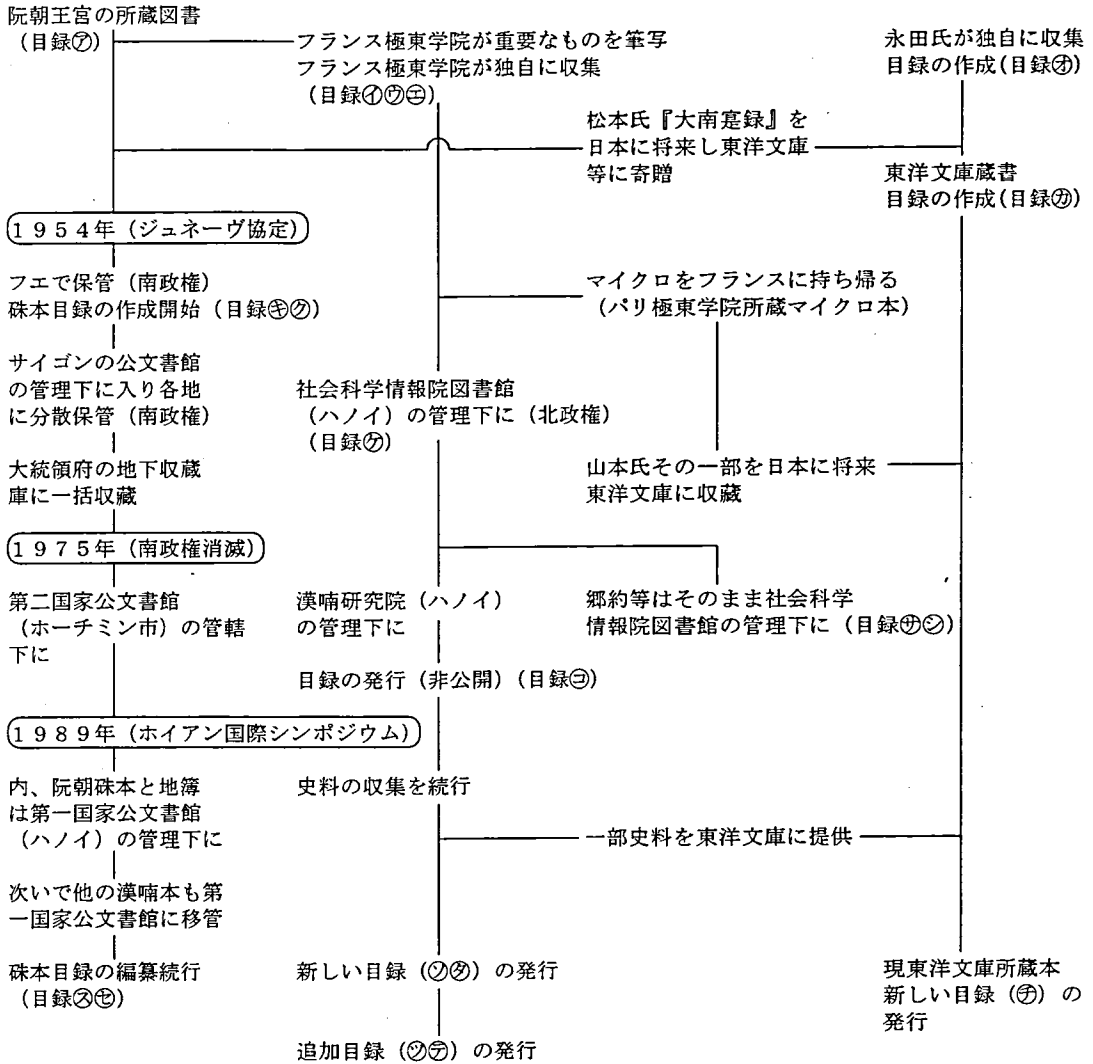
奉旨準臣館繼修列傳正編二集、仍斷自明命初年、至同慶三年底以前。(中略) 先朝耆碩、亡年在後、而致事在前、事狀顯著、及諸省開冊、何係素有旁能、而事狀詳明者、併録、以便一端 (後略)。

(18) ただしその姿勢には必ずしも一貫性はなく、

- 交易相手に対して安南国王を称したこともあったことを桃木 [1995] が指摘している。
- (19) [表1] では複数の省に記述をもつ人物に●を付してある。
- (20) 『大南寔録』前編では阮氏の祖先が清化出身者であることは記してあるものの、藍山蜂起への言及はない。また近年刊行された阮朝の末裔たちによる『阮福族家譜』では、現在も清化に存在する阮氏の第一支（宗家）への言及がない。
- (21) 前述の如く、版本からの再写が明らかなA.69本広治の巻は集計からはずした。
- (22) 『大南列傳』との照合も行ったのであるから、『列傳』にありながら版本、写本の両方から漏れたのは何故かという問題設定も成り立つ。データは残っているので今後に期したい。
- (23) 筆者はこの「大法国」という言葉に、何かしら慇懃無礼さのニュアンスが込められているような気がしてならない。ヴェトナム戦争時に北側が韓国軍を、侮蔑感を込めて「大韓」と呼んだように。
- (24) この問題に関してはヴェトナム本国を中心として膨大な研究蓄積があるが、日本語で読めるものとして、白石 [1993] をあげておく。
- (25) 筆者は編纂時点での状況によってその書に評価を下すことだけが歴史研究の目的でないと考える。『一統志』の撰者、とくに国史館総裁高春育には多くの著作があり、それらを読み解くことによってはじめて彼らの意図や、所謂「王朝ナショナリズム」の問題にふみこむことが可能であろう。
- (26) このシンポジウムの内容に関しては『史学研究』244号に特集が組まれている。
- (27) この訳本にはどの部分でA.69本を参照したのかなど、一切注記がない。
- (28) 幸い、最近ではインターネットが広く利用されるようになり、情報伝達には不自由しない時代となった。また史料の電子化で懸案となっていた難漢字の処理もUnicodeの採用により、ずいぶん改善が進んでいる。出版科研でも2003年6月の研究会（於九州大学）で国文学研究資料館研究情報部の原正一郎氏が「メタデータによる東洋文化資源の統合」と題して資料の保存、データ化などの現状について報告をされている。

（広島大学大学院文学研究科助教授）

図1 ヴェトナム漢喃史料の歩み



(注)個人蔵のコレクションの内、松本氏 (目録㉘) およびガスパルドン氏のは慶應義塾大学に、山本氏所蔵本は東洋文庫に寄贈された。また日本では国立国会図書館古典籍室に数十冊の漢喃本が所蔵されている (目録㉞)。さらにパリの国立図書館 (目録㉟)、国民図書館 (目録㊳)、アジア協会 (目録㊴) などにもかなりの漢喃本が存在する。

表1 各本人物志对照

| 氏名 | 廷録 | 版本 | 公文書館 | | 史学院 | | 漢喃研究院 | | | | | | 職 | 对抗相手 | 犧牲 | |
|-------|----------|--------|-----------|-------|---------------------|--------|--------|---------|----------|---------|----------|--------|-------|------|--------|---|
| | | | V.685-695 | Hv.38 | Hv.140 | A.69 | A.1448 | VHv.985 | VHv.1707 | VHv.129 | VHv.1359 | | | | | |
| 宋福治 ● | 0・03・02 | TH・001 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 鄭氏 | |
| 宋福洽 ● | 0・03・03 | TH・002 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 宋福和 ● | 0・03・04 | TH・003 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮久壽 ● | 0・04・01 | TH・004 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 鄭氏 | × |
| 宋福簾 ● | 0・04・09 | TH・005 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 鄭氏 | |
| 朱有太 | 0・04・15 | TH・006 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 宋文魁 | 0・04・20 | TH・007 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 裴公繼 ● | 0・04・21 | TH・008 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 宋福添 | 1・13・01 | TH・009 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮有瑞 ● | 1・13・05 | TH・010 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 張福律 | 1・13・11 | TH・011 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 宋福珠 | 1・14・05 | TH・012 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | |
| 張文銘 | 1・15・16 | TH・013 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | |
| 陳公頤 | 1・17・09 | TH・014 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | |
| 阮光耀 | 1・18・08 | TH・015 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮頌 | 1・20・15 | TH・016 | TH・002 | TH・欠卷 | TH・031 | TH・003 | TH・003 | TH・003 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 何功榮 | 1・28・03 | TH・017 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山 | |
| 丁達菴 | 1・18・05 | TH・018 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・001 ¹ | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・001 | TH・001 | TH・欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮廷哲 | 2・17・05 | TH・019 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 農文雲 | |
| 何維藩 | 2・25・01 | TH・020 | TH・008 | TH・欠卷 | TH・004 | TH・無 | TH・010 | TH・010 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・004 | TH・004 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 阮春 | 2・15・05 | TH・021 | TH・003 | TH・欠卷 | TH・036 | TH・無 | TH・008 | TH・008 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | 西山/黎文傑 | |
| 范春碧 | 2・40・21 | TH・022 | TH・009 | TH・欠卷 | TH・002 | TH・無 | TH・011 | TH・011 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・002 | TH・002 | TH・欠卷 | ○ | 黎文傑 | × |
| 枚奕俊 | 2・34・11 | TH・023 | TH・010 | TH・欠卷 | TH・003 | TH・無 | TH・013 | TH・013 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・003 | TH・003 | TH・欠卷 | ○ | | × |
| 范清 | 2・25・13付 | TH・024 | TH・011 | TH・欠卷 | TH・039 | TH・005 | TH・014 | TH・014 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 阮仲滔 | 2・27・09 | TH・025 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | □ | | |
| 汝伯仕 | 2・28・04 | TH・026 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 杜春吉 | 2・42・08 | TH・027 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 阮登仕 | 2・40・34 | TH・028 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | × |
| 黃造 | 2・41・09 | TH・029 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | × |
| 陳文美 | 2・41・10 | TH・030 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | × |
| 黎輝濯 | 2・41・11 | TH・031 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | × |
| 阮輝紀 | 2・34・06 | TH・032 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | | |
| 琴伯頭 | | TH・033 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・006 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・006 | TH・006 | TH・欠卷 | □ | | × |
| 阮維慈 ● | 0・03・06 | TH・無 | TH・001 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | TH・欠卷 | TH・無 | TH・無 | TH・欠卷 | ○ | 鄭氏 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|---|-----|---|
| 阮怡 | 2・41・23 | NA・028 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | | | × |
| 阮玉振 | 2・40・02付 | NA・029 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | 仏 | | × |
| 阮德遠 | 2・38・08 | NA・030 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | 仏 | | |
| 阮文交 | 2・38・10 | NA・031 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | | | |
| 阮有環 | 2・41・30 | NA・032 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | | | × |
| 阮有立 | 2・38・10付 | NA・033 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | 仏 | | |
| 阮春温 | 2・39・23 | NA・034 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | 仏 | | |
| 胡伯風 | 2・39・25 | NA・035 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | 仏 | | × |
| 阮秋 | ● | NA・無 | NA・004 | NA・欠卷 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | NA・004 | □ | | | |
| 魏克節 | ● | NA・無 | NA・007 | NA・欠卷 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | NA・007 | ○ | | | |
| 張國用 | ● | NA・無 | NA・008 | NA・欠卷 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | NA・008 | ○ | | | × |
| 黎敏德 | ● | NA・無 | NA・009 | NA・欠卷 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | NA・009 | △ | | | |
| 楊文風 | ● | NA・無 | NA・010 | NA・欠卷 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | NA・010 | □ | | 農文雲 | × |
| 阮久理 | | NA・無 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・009 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | □ | | | |
| 發炳真 | | NA・無 | NA・無 | NA・欠卷 | NA・016 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | NA・無 | ○ | | 西山 | × |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|---------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|--|----|---|
| 阮秋 | ● | 1・20・11 | HT・001 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | □ | | | |
| 阮公著 | | 2・20・03 | HT・002 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 魏克節 | ● | 2・26・07 | HT・003 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 張國用 | ● | 2・29・14 | HT・004 | HT・欠卷 | HT・002 | HT・無 | HT・無 | HT・002 | HT・無 | HT・002 | HT・無 | HT・002 | HT・無 | HT・002 | HT・無 | ○ | | | × |
| 潘廷謙 | | 2・35・08 | HT・005 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | × |
| 潘三省 | | 2・33・19 | HT・006 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 黎岐 | | 2・38・09 | HT・007 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | × |
| 枚世欽 | | 2・38・11 | HT・008 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 魏克履 | | 2・26・08 | HT・009 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 鄧文喬 | | 2・38・21 | HT・010 | HT・欠卷 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | HT・無 | ○ | | | |
| 楊文風 | ● | 2・40・37 | HT・011 | HT・欠卷 | HT・004 | HT・無 | HT・004 | HT・無 | HT・004 | HT・無 | HT・004 | HT・無 | HT・004 | HT・無 | HT・004 | □ | | | × |
| 黎敏德 | ● | 2・43・06 | HT・012 | HT・欠卷 | HT・003 | HT・無 | HT・003 | HT・無 | HT・003 | HT・無 | HT・003 | HT・無 | HT・003 | HT・無 | HT・003 | △ | | | |
| 阮文循 | | | HT・無 | HT・欠卷 | HT・001 | HT・無 | HT・001 | HT・無 | HT・001 | HT・無 | HT・001 | HT・無 | HT・001 | HT・無 | HT・001 | □ | | | |
| 阮有鑑 | ● | 0・03・12 | QB・001 | QB・欠卷 | QB・無 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | QB・001 | □ | | 鄭氏 | |
| 阮有鏡 | ● | 0・03・14 | QB・002 | QB・欠卷 | QB・無 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | QB・002 | □ | | | × |
| 阮久喬 | ● | 0・04・01 | QB・003 | QB・欠卷 | QB・無 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | QB・003 | □ | | 鄭氏 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|----------|--------|--------|-------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|-------|---|-----|---|
| 阮文盛 | | BD·無 | BD·010 | BD·010 | BD·欠卷 | BD·010 | BD·欠卷 | BD·010 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·020 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文春 | | BD·無 | BD·014 | BD·014 | BD·欠卷 | BD·014 | BD·欠卷 | BD·014 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 鄧文隆 | | BD·無 | BD·016 | BD·016 | BD·欠卷 | BD·016 | BD·欠卷 | BD·016 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文春 | | BD·無 | BD·024 | BD·024 | BD·欠卷 | BD·024 | BD·欠卷 | BD·024 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·010 | BD·欠卷 | □ | 戲文雲 | × |
| 阮文政 | ● | 0·03·10 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·008 | BD·欠卷 | BD·008 | BD·008 | BD·003 | BD·欠卷 | □ | | × |
| 朱文接 | | 1·06·03 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·009 | BD·欠卷 | BD·009 | BD·009 | BD·006 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮龍 | ● | 1·14·03 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·010 | BD·欠卷 | BD·010 | BD·010 | BD·018 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 鄧文綸 | | 2·40·07付 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·013 | BD·欠卷 | BD·013 | BD·013 | BD·032 | BD·欠卷 | □ | 戲文霞 | × |
| 阮文告 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·014 | BD·欠卷 | BD·014 | BD·014 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 戲文雲 | × |
| 阮文德 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·015 | BD·欠卷 | BD·015 | BD·015 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 武文才 | ● | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·016 | BD·欠卷 | BD·016 | BD·016 | BD·014 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 枚進萬 | ● | 1·14·09 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·017 | BD·欠卷 | BD·017 | BD·017 | BD·022 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文力 | ● | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·015 | BD·015 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文隣 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·009 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 陳永科 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·011 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文登 | ● | 1·14·09付 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·021 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | | × |
| 阮文綬 | ● | 1·14·09付 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·023 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文揚 | ● | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·024 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文敢 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·025 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮傳 | | | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·無 | BD·欠卷 | BD·無 | BD·027 | BD·無 | BD·欠卷 | □ | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|-------|---|----|---|
| 梁文政 | ● | 0·03·10 | PY·001 | PY·001 | PY·001 | PY·001 | PY·001 | PY·001 | PY·001 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·001 | PY·001 | PY·欠卷 | □ | | |
| 朱文接 | | 1·06·03 | PY·002 | PY·004 | PY·004 | PY·004 | PY·004 | PY·004 | PY·004 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·004 | PY·004 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮龍 | ● | 1·14·03 | PY·003 | PY·005 | PY·005 | PY·005 | PY·005 | PY·005 | PY·005 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·005 | PY·005 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文力 | ● | | PY·004 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·無 | PY·無 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 武文才 | ● | | PY·005 | PY·007 | PY·007 | PY·007 | PY·007 | PY·007 | PY·007 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·007 | PY·007 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 枚進萬 | ● | 1·14·09 | PY·006 | PY·006 | PY·006 | PY·006 | PY·006 | PY·006 | PY·006 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·006 | PY·006 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文揚 | ● | | PY·007 | PY·009 | PY·009 | PY·009 | PY·009 | PY·009 | PY·009 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·009 | PY·009 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文順 | | 1·14·09付 | PY·008 | PY·003 | PY·003 | PY·003 | PY·003 | PY·003 | PY·003 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·003 | PY·003 | PY·欠卷 | □ | | |
| 陶致 | | 2·26·02 | PY·009 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·無 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·無 | PY·無 | PY·欠卷 | □ | | |
| 阮文登 | ● | 1·14·09付 | PY·無 | PY·002 | PY·002 | PY·002 | PY·002 | PY·002 | PY·002 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·002 | PY·002 | PY·欠卷 | □ | | |
| 阮文綬 | ● | 1·14·09付 | PY·無 | PY·008 | PY·008 | PY·008 | PY·008 | PY·008 | PY·008 | PY·欠卷 | PY·欠卷 | PY·008 | PY·008 | PY·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮端 | | 1·14·01 | KH·001 | KH·001 | KH·欠卷 | KH·001 | KH·001 | KH·001 | KH·001 | KH·欠卷 | KH·001 | KH·001 | KH·001 | KH·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 陳文能 | | 2·14·01 | KH·002 | KH·006 | KH·欠卷 | KH·002 | KH·002 | KH·002 | KH·002 | KH·欠卷 | KH·002 | KH·002 | KH·006 | KH·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮春淑 | | 1·12·10 | KH·003 | KH·003 | KH·欠卷 | KH·003 | KH·003 | KH·003 | KH·003 | KH·欠卷 | KH·003 | KH·003 | KH·003 | KH·欠卷 | ○ | | |
| 阮文漢 | | | KH·004 | KH·002 | KH·欠卷 | KH·002 | KH·002 | KH·002 | KH·無 | KH·欠卷 | KH·無 | KH·002 | KH·002 | KH·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 范文緒 | | | KH·005 | KH·004 | KH·欠卷 | KH·004 | KH·004 | KH·004 | KH·無 | KH·欠卷 | KH·無 | KH·004 | KH·004 | KH·欠卷 | □ | 西山 | × |
| 阮文貢 | | | KH·006 | KH·005 | KH·欠卷 | KH·005 | KH·005 | KH·005 | KH·無 | KH·欠卷 | KH·無 | KH·005 | KH·005 | KH·欠卷 | □ | 西山 | × |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|-------|------|--------|-------|---|----|---|
| 陳文順 | KH・007 | KH・007 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・007 | KH・欠巻 | □ | 西山 | × |
| 甲文才 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・004 | KH・004 | KH・欠巻 | KH・004 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・004 | KH・欠巻 | □ | 西山 | |
| 阮文達 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・005 | KH・005 | KH・欠巻 | KH・005 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・005 | KH・欠巻 | □ | 西山 | |
| 阮文和 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・006 | KH・006 | KH・欠巻 | KH・006 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・006 | KH・欠巻 | □ | 西山 | |
| 黎文堅 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・007 | KH・007 | KH・欠巻 | KH・007 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・007 | KH・欠巻 | □ | 西山 | |
| 陳文柳 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・欠巻 | KH・無 | KH・008 | KH・欠巻 | □ | 西山 | |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|-------|---|-----|---|
| 阮廷佑 | 1・12・04 | BT・001 | BT・001 | BT・001 | BT・001 | BT・001 | BT・001 | BT・欠巻 | BT・001 | BT・001 | BT・欠巻 | ○ | 西山 | |
| 武文環 | | BT・002 | BT・002 | BT・002 | BT・002 | BT・002 | BT・002 | BT・欠巻 | BT・002 | BT・002 | BT・欠巻 | □ | 西山 | |
| 阮文在 | | BT・003 | BT・003 | BT・003 | BT・無 | BT・003 | BT・無 | BT・欠巻 | BT・無 | BT・003 | BT・欠巻 | □ | 西山 | |
| 潘連岐 | | BT・004 | BT・004 | BT・004 | BT・003 | BT・004 | BT・003 | BT・欠巻 | BT・003 | BT・003 | BT・欠巻 | ○ | 西山 | |
| 黎增輝 | 2・40・17 | BT・005 | BT・007 | BT・007 | BT・004 | BT・007 | BT・004 | BT・欠巻 | BT・004 | BT・007 | BT・欠巻 | ○ | 巖文雲 | × |
| 鄧德述 | ● | BT・無 | BT・005 | BT・005 | BT・005 | BT・005 | BT・005 | BT・欠巻 | BT・005 | BT・005 | BT・欠巻 | △ | 西山 | |
| 阮若山 | ● | BT・無 | BT・006 | BT・006 | BT・無 | BT・006 | BT・無 | BT・欠巻 | BT・無 | BT・006 | BT・欠巻 | ○ | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---------|--------|----------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|----|--|
| 鄧德述 | ● | NT・001 | NT・未分割 ¹⁾ | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | △ | 西山 | |
| 阮若山 | ● | NT・002 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | ○ | | |
| 阮琢之 | | NT・003 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | ○ | 仏 | |
| 潘忠 | 2・35・10 | NT・004 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | NT・未分割 | ○ | 仏 | |

TH=清化、NA=乂安、HT=河静、QB=広平、QT=広治、TT=承天、TTQT=承天広治、QN=広南、QG=広義、BD=平定、KH=慶和、BT=平順、NT=寧順

『大南列傳』の数字表記「X・Y・Z」。Xは0が列傳前編、1が列傳初集、2が列傳二集。Yは巻数。Zは巻の中での掲載順。付とあるのは付伝。

●=同じ人物の伝が二つ以上存在する、もしくは省をまたいで存在する。

無=巻はあるがその中に名前が出てこない。

欠巻=その巻自体が無い。

□=武臣、○=文臣、隠=隠逸

×=戦死、もしくはそれに近い捕殺、戦病死、自殺。

* 1 Hv.140の清化巻の005、008-028は採録条件外。

* 2 Hv.140の乂安巻には「本朝」に「統補」あり。「本朝」010と「統補」001-015は採録条件外。

* 3 Hv.140・A.69広平巻には「本朝」に「附本朝」あり。

* 4 A.69承天巻は「尊室」をすべて避諱を無視して「宗室」と記している。

* 5 写本の段階では寧順はまだ平順と未分割ゆえ、巻が存在しない。

表2 各省ごとの採録人名の相関関係

| | | 文書館 | 史学院 | | 漢喃研究院 | | | | |
|-------|-----------|-----------|-------|--------|-------|--------|---------|----------|---------|
| | | V.685-695 | Hv.38 | Hv.140 | A.69 | A.1448 | VHv.985 | VHv.1707 | VHv.129 |
| | 版本 | | | | | | | | |
| 文書館 | V.685-695 | | | | | | | | |
| 史学院 | Hv.38 | | | | | | | | |
| | Hv.140 | | | | | | | | |
| 漢喃研究院 | A.69 | | | | | | | | |
| | A.1448 | | | | | | | | |
| | VHv.985 | | | | | | | | |
| | VHv.1707 | | | | | | | | |

凡例

| | |
|----|----|
| 清化 | 広南 |
| 乂安 | 広義 |
| 河静 | 平定 |
| 広平 | 富安 |
| 広治 | 慶和 |
| 承天 | 平順 |

※寧順道は版本にのみ存在し、すべての写本が扱っていないので省略した

| | |
|--|------------------------|
| | 相関関係極めて大きい |
| | 相関関係かなり大きい |
| | 相関関係小さい |
| | 照合の一方もしくは両方が欠巻のため、比較不能 |

表3 数値化した相関関係

| | | 文書館 | 史学院 | | 漢喃研究院 | | | | |
|-------|-----------|-----------|-------|--------|-------|--------|---------|----------|---------|
| | | V.685-695 | Hv.38 | Hv.140 | A.69 | A.1448 | VHv.985 | VHv.1707 | VHv.129 |
| 版本 | | 0.5 | 0.38 | 0.44 | 0.42 | 0.17 | 0* | 0.09 | 0.4 |
| 文書館 | V.685-695 | | 1.83* | 1 | 0.9 | 0.7 | 1* | 0.3 | 1 |
| 史学院 | Hv.38 | | | 1.2* | 0.88 | 0.63 | 1* | 0.14 | 1.29 |
| | Hv.140 | | | | 1.56 | 1 | 1* | 0.89 | 1 |
| 漢喃研究院 | A.69 | | | | | 1.17 | 1.33* | 0.91 | 1.1 |
| | A.1448 | | | | | | 1.33* | 1 | 1 |
| | VHv.985 | | | | | | | 1* | 1* |
| | VHv.1707 | | | | | | | | 0.22 |

(注)数値は表1の各省の相関関係が極めて高いを2、かなり高いを1とし、全12省（寧順道は版本にのみ存在し、すべての写本が扱っていないので省略した）から欠けている省を引いた数で割ったものである。網掛け部分は相関関係が高い、(0.8以上を目安とした。上記の計算法では相関関係が最大の時は2、最低の時は0となる)と考えられるが、欠けている省が6省以上の項目には*を付してある。

表4 職別に見た人数

| 北中部 | 武 班 | | | 文 班 | | | 隠 逸 | | | 各省(府、道)合計 | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|-----------|----|---|-----|-----|-----|-----|
| | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | | | | |
| 清化省 | C | 3 | 9 | 12 | C | 5 | 2 | 7 | C | 0 | 0 | 0 | C | 8 | 11 | 19 |
| | D | 18 | | | D | 7 | | | D | 0 | | | D | 25 | | |
| | 計 | 21 | | 30 | 計 | 12 | | 14 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 33 | | 44 |
| 又安省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 4 | 2 | 6 | C | 3 | 3 | 6 | C | 0 | 2 | 2 | C | 7 | 7 | 14 |
| | D | 1 | | | D | 27 | | | D | 1 | | | D | 29 | | |
| 計 | 5 | | 7 | 計 | 30 | | 33 | 計 | 1 | | 3 | 計 | 36 | | 43 | |
| 河静省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 1 | 1 | 2 | C | 2 | 0 | 2 | C | 1 | 0 | 1 | C | 4 | 1 | 5 |
| | D | 1 | | | D | 7 | | | D | 0 | | | D | 8 | | |
| 計 | 2 | | 3 | 計 | 9 | | 9 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 12 | | 13 | |
| 広平省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 13 | 4 | 17 | C | 24 | 0 | 24 | C | 0 | 0 | 0 | C | 37 | 4 | 41 |
| | D | 5 | | | D | 11 | | | D | 0 | | | D | 16 | | |
| 計 | 18 | | 22 | 計 | 35 | | 35 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 53 | | 57 | |
| 広治省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 6 | 0 | 7 | C | 9 | 0 | 15 | C | 0 | 0 | 0 | C | 15 | 0 | 22 |
| | D | 1 | | | D | 6 | | | D | 0 | | | D | 7 | | |
| 計 | 7 | | 7 | 計 | 15 | | 15 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 22 | | 22 | |
| 北中部計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 27 | 16 | 44 | C | 43 | 5 | 54 | C | 1 | 2 | 3 | C | 71 | 23 | 101 |
| | D | 26 | | | D | 58 | | | D | 1 | | | D | 85 | | |
| 計 | 53 | | 69 | 計 | 101 | | 106 | 計 | 2 | | 4 | 計 | 156 | | 179 | |
| 承天府 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 59 | 7 | 66 | C | 39 | 18 | 57 | C | 0 | 1 | 1 | C | 98 | 26 | 124 |
| | D | 34 | | | D | 22 | | | D | 0 | | | D | 56 | | |
| 計 | 93 | | 100 | 計 | 61 | | 79 | 計 | 0 | | 1 | 計 | 154 | | 180 | |
| 南中部 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 広南省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 12 | 3 | 15 | C | 21 | 4 | 25 | C | 0 | 0 | 0 | C | 33 | 7 | 40 |
| | D | 7 | | | D | 9 | | | D | 0 | | | D | 16 | | |
| 計 | 19 | | 22 | 計 | 30 | | 34 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 49 | | 56 | |
| 広義省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 19 | 2 | 21 | C | 7 | 3 | 10 | C | 0 | 4 | 4 | C | 26 | 9 | 35 |
| | D | 0 | | | D | 3 | | | D | 0 | | | D | 3 | | |
| 計 | 19 | | 21 | 計 | 10 | | 13 | 計 | 0 | | 4 | 計 | 29 | | 38 | |
| 平定省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 10 | 22 | 32 | C | 10 | 0 | 10 | C | 0 | 0 | 0 | C | 20 | 22 | 42 |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | |
| 計 | 10 | | 32 | 計 | 10 | | 10 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 20 | | 42 | |
| 富安省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 7 | 2 | 9 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 7 | 2 | 9 |
| | D | 2 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 2 | | |
| 計 | 9 | | 11 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 9 | | 11 | |
| 慶和省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 6 | 5 | 11 | C | 1 | 0 | 1 | C | 0 | 0 | 0 | C | 7 | 5 | 12 |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | |
| 計 | 6 | | 11 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 7 | | 12 | |
| 平順省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 2 | 0 | 2 | C | 3 | 1 | 4 | C | 0 | 1 | 1 | C | 5 | 2 | 7 |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | |
| 計 | 2 | | 2 | 計 | 3 | | 4 | 計 | 0 | | 1 | 計 | 5 | | 7 | |
| 寧順道 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 |
| | D | 0 | | | D | 3 | | | D | 1 | | | D | 4 | | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 3 | | 3 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 4 | | 4 | |
| 南中部計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 56 | 34 | 90 | C | 42 | 8 | 50 | C | 0 | 5 | 5 | C | 98 | 47 | 145 |
| | D | 9 | | | D | 15 | | | D | 1 | | | D | 25 | | |
| 計 | 65 | | 99 | 計 | 57 | | 65 | 計 | 1 | | 6 | 計 | 123 | | 170 | |
| 職別合計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | |
| | C | 142 | 57 | 200 | C | 124 | 31 | 161 | C | 1 | 8 | 9 | C | 267 | 96 | 370 |
| | D | 69 | | | D | 95 | | | D | 2 | | | D | 166 | | |
| 計 | 211 | | 268 | 計 | 219 | | 250 | 計 | 3 | | 11 | 計 | 433 | | 529 | |

注：A=版本有名、B=版本無名、C=写本有名、D=写本無名

表5 事件別に見た人数

| 北中部 | 対鄭氏 | | | 対西山 | | | 対黎文僂・農文雲 | | | 対フランス | | | 省(府、道)別合計 | | | | | | | | |
|------|-----|----|----|-----|-----|-----|----------|-----|----|-------|----|----|-----------|----|----|---|-----|-----|-----|-----|----|
| | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | | | | | | |
| 清化省 | C | 0 | 1 | 1 | C | 2 | 6 | 8 | C | 3 | 0 | 3 | C | 0 | 0 | 0 | C | 5 | 7 | 12 | |
| | D | 4 | | | D | 12 | | | D | 1 | | | D | 0 | | | D | 17 | | 17 | |
| | 計 | 4 | | 5 | 計 | 14 | | 20 | 計 | 4 | | 4 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 22 | | 29 | |
| 乂安省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 3 | 1 | 4 | C | 0 | 1 | 1 | C | 0 | 0 | 0 | C | 3 | 2 | 5 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 5 | | | D | 5 | | 5 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 3 | | 4 | 計 | 0 | | 1 | 計 | 5 | | 5 | 計 | 8 | | 10 | | |
| 河静省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | 0 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | | |
| 広平省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 3 | 0 | 3 | C | 11 | 1 | 12 | C | 2 | 0 | 2 | C | 1 | 0 | 1 | C | 17 | 1 | 18 | |
| | D | 0 | | | D | 5 | | | D | 1 | | | D | 4 | | | D | 10 | | 10 | |
| 計 | 3 | | 3 | 計 | 16 | | 17 | 計 | 3 | | 3 | 計 | 5 | | 5 | 計 | 27 | | 28 | | |
| 広治省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 7 | 0 | 7 | C | 2 | 0 | 2 | C | 2 | 0 | 2 | C | 11 | 0 | 11 | |
| | D | 0 | | | D | 1 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 1 | | 1 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 8 | | 8 | 計 | 2 | | 2 | 計 | 2 | | 2 | 計 | 12 | | 12 | | |
| 北中部計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 3 | 1 | 4 | C | 23 | 8 | 31 | C | 7 | 1 | 8 | C | 3 | 0 | 3 | C | 36 | 1 | 0 | 46 |
| | D | 4 | | | D | 18 | | | D | 2 | | | D | 9 | | | D | 33 | | 33 | |
| 計 | 7 | | 8 | 計 | 41 | | 49 | 計 | 9 | | 10 | 計 | 12 | | 12 | 計 | 69 | | 79 | | |
| 承天府 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 8 | 0 | 8 | C | 45 | 9 | 54 | C | 8 | 1 | 9 | C | 0 | 0 | 0 | C | 61 | 10 | 71 | |
| | D | 0 | | | D | 10 | | | D | 9 | | | D | 12 | | | D | 31 | | 31 | |
| 計 | 8 | | 8 | 計 | 55 | | 64 | 計 | 17 | | 18 | 計 | 12 | | 12 | 計 | 92 | | 102 | | |
| 広南省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 17 | 5 | 22 | C | 0 | 0 | 0 | C | 1 | 0 | 1 | C | 18 | 5 | 23 | |
| | D | 0 | | | D | 2 | | | D | 0 | | | D | 5 | | | D | 7 | | 7 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 19 | | 24 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 6 | | 6 | 計 | 25 | | 30 | | |
| 広義省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 17 | 1 | 18 | C | 1 | 1 | 2 | C | 2 | 1 | 3 | C | 20 | 3 | 22 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 1 | | | D | 1 | | | D | 2 | | 2 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 17 | | 18 | 計 | 2 | | 3 | 計 | 3 | | 4 | 計 | 22 | | 25 | | |
| 平定省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 2 | 0 | 2 | C | 9 | 16 | 25 | C | 3 | 2 | 5 | C | 1 | 0 | 1 | C | 15 | 18 | 33 | |
| | D | 0 | | | D | 2 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 2 | | 2 | |
| 計 | 2 | | 2 | 計 | 11 | | 27 | 計 | 3 | | 5 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 17 | | 35 | | |
| 富安省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 5 | 1 | 6 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 5 | 1 | 6 | |
| | D | 0 | | | D | 1 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 1 | | 1 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 6 | | 7 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 6 | | 7 | | |
| 慶和省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 6 | 5 | 11 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 6 | 5 | 11 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | 0 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 6 | | 11 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 6 | | 11 | | |
| 平順省 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 4 | 0 | 4 | C | 1 | 0 | 1 | C | 0 | 0 | 0 | C | 5 | 0 | 5 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | 0 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 4 | | 4 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 5 | | 5 | | |
| 寧順道 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 0 | 0 | 0 | C | 1 | 0 | 1 | C | 0 | 0 | 0 | C | 0 | 0 | 0 | C | 1 | 0 | 1 | |
| | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 0 | | | D | 2 | | | D | 2 | | 2 | |
| 計 | 0 | | 0 | 計 | 1 | | 1 | 計 | 0 | | 0 | 計 | 2 | | 2 | 計 | 3 | | 3 | | |
| 南中部計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 2 | 0 | 2 | C | 59 | 28 | 87 | C | 5 | 3 | 8 | C | 4 | 1 | 5 | C | 70 | 32 | 102 | |
| | D | 0 | | | D | 5 | | | D | 1 | | | D | 8 | | | D | 14 | | 14 | |
| 計 | 2 | | 2 | 計 | 64 | | 92 | 計 | 6 | | 9 | 計 | 12 | | 13 | 計 | 84 | | 116 | | |
| 事件別計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 | A | B | 計 |
| | C | 13 | 1 | 14 | C | 127 | 45 | 172 | C | 20 | 5 | 25 | C | 7 | 1 | 8 | C | 167 | 52 | 219 | |
| | D | 4 | | | D | 33 | | | D | 12 | | | D | 29 | | | D | 78 | | 78 | |
| 計 | 17 | | 18 | 計 | 160 | | 205 | 計 | 32 | | 38 | 計 | 36 | | 37 | 計 | 245 | | 297 | | |

注：A = 版本有名、B = 版本無名、C = 写本有名、D = 写本